忘れ去られたドイツ人合唱指揮者オットー・ロープ
Otto Lob, a former German Chor Conductor now in oblivion

長友　雅美

本研究ノートは，アメリカ合衆国で一時期活躍し，その後帰国した**オットー・ロープ**（Otto Alexander Victor Lob: 1834－1908）【下写真】の足跡を辿ることを目的とする。

写真：ドイツ学生歌研究家ライムント・ラング(Raimund Lang)氏提供【シカゴで撮影されたことだけが判明している。】

オットー・ロープは「ドイツ学生歌」の作曲家として知られている。1906年に作曲した「スミレが咲き誇る頃には学生だ Student sein, wenn die Veilchen blühen」の歌い出しを持つ『ドイツ学生賛歌』,『ハイデルベルク，汝若き泉よ Heidelberg, Du Jugendbronnen』[1],『ああ，至福に溢れる若き日々 O wonnevolle Jugentzeit』の三曲は，ドイツ，オーストリア，スイスなどの学士会会員の間で愛唱される学生歌の「定番」である。わけても『ハイデルベルク，汝若き泉よ』の旋律にはドイツ各地の大学町の「ご当地ソング」として様々な歌詞が付けられ，学士会(Studentenverbindung)に縁のない人にも口ずさまれている。だがオットー・ロープの別の顔，彼がシカゴで20年あまりも合唱指揮者・作曲家として活躍し，シカゴの音楽振興に貢献したことについては完全に忘れさられている。彼の名はどのアメリカの音楽辞典にも記されておらず，1961年版の『リーマン音楽辞典』がこの人物にふれているにすぎない。[2]

● リンドラーからケルンまで【1834年～1864年】

1834年，オットー・ロープはケルン市東方約30キロに位置する山村リンドラー【Lindlar 人口約２万２千人】で，屋根・外壁用の石版建材商ヤーコブ・ロープの第８子として生まれた。地元の小学校

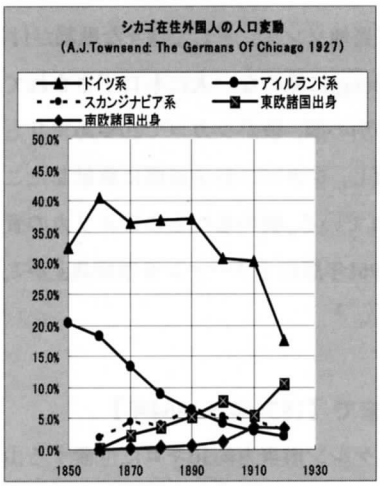
[1] このドイツ語の題名 Heidelberg Du Jugendbronnen は誤りではない。何ゆえ Jugendbrunnen ではないのかについては，ライムンド・ラング・長友雅美共著:『ドイツ学生歌の世界　－その言語文化史的断面－』，シンフォニアの 168 頁参照。

[2] Riemann Musik Lexikon. 12.völlig neubearb.Aufl. in drei Bänden. Hg.v.Wilibald Curlitt. Mainz/London/ N.Y./ Paris: B.Schott's Söhne. 1961.Personenteil L-Z 87 頁。

を卒業後，ケンペン Kempen の助教員養成校を経て，1854年から1858年までミュールハイムちかくのブリュック Brück bei Mülheim 村で補助教員を，その後ケルン市内で小学校教員を務めた。この時期，同市内の「カーニバル協会」[3]のために多くの「カーニバルのための歌 Karnivallied」の作曲を手がけ，彼の名は知られていたらしいが，この頃の楽譜は現在まだ発見されてはいない。ロープがアメリカへの旅立ちを決意したのは1863年の暮れで，翌年1月12日，70名にも及ぶ知人たちによる壮行会がケルン市内でおこなわれた。[4]

●　シカゴ時代【1864年～1884年】

ロープが従兄弟ルードヴィッヒ・コート(Ludwig Court:1819－?)を頼り，シカゴに住み着いた頃，アメリカ国内はまだ南北戦争の最中であった。北軍に有利な戦局の中，1864年の第20回大統領選挙で再選されたリンカーンは二期目の政権に入ったが，翌年4月14日，暗殺されてしまう。事件後，各地で告別の儀を執り行うため，4月21日に彼の棺を乗せた特別列車がワシントンを出発した。ハリスバーグ，フィラデルフィア，ニューヨーク，バッファロー，クリーブランド，コロンブス，インディアナポリス，シカゴを経て，列車は故郷スプリングフィールドまで走った。シカゴでは，５月１日から翌日にかけ，棺が同市内の高等裁判所に一時安置され，亡き大統領を弔う式典が開催された。シカゴはリンカーンが大統領就任以前から幾度も訪ねた街であり，彼を支援したドイツ系アメリカ人が多く住む都市でもあった。



【参考のために】

現在，シカゴ市内の特定地区にドイツ系アメリカ人の子孫を見出すことは不可能であるが，19世紀後半から第一次世界大戦前頃まで，ドイツ系の人々が市内北部【ノースサイド】地区に多く居住していた。1860年の時点では，シカゴ在住の外国人のなかでドイツ系の人々は約22.000（比率にして40．5%），【左図グラフ参照】[5]。また1870年頃にはシカゴの歴史研究家ホッフマイスターによれば59,299人シカゴには59．299人がドイツ生まれであり，これはシカゴの総人口の19.83%に当たる[6]，という。さらにオッ

[3] カーニバル【謝肉祭：毎年２月中旬頃に開催されるキリスト教の祭り】では，ドイツ各地でも町をあげて盛大なパレードや夜会が繰り広げられる。この祝祭の日に酒を酌み交わし口ずさむのが「カーニバルの歌」である。

[4] Ausschnitt aus dem Rheinisch Bergischen Kreisblatt. Westdeutscher Beobachter vom 1.Dez. 1933.

[5] Andrew Jacke Townsend. The Germans of Chicago. 1927.(University of Chicago. Ph.Diss.)の 10 頁以下の数値を参考に論者長友が補足修正し作成。

[6] Rudolf A.Hofmeister: The Germans of Chicago. Champain, Illinois: Stipes Publishing Co., 1976, p.95.　1860年の国勢調査では，イリノイ州全体の人口が約 20 万 3750 人，うち 66%がドイツ系アメリカ人であっ

トー・ロープがシカゴを去った後の1890年の人口統計調査では，シカゴ在住で外国生まれの人の割合ではドイツ系が36%も占めている。

この偉大な大統領への「最後のお別れ」を，合唱団による追悼歌演奏で盛り上げるため，シカゴのドイツ語新聞に次の様な記事が掲載された。「シカゴ市内，および近郊に住む全てのドイツ人歌手と合唱協会員に告ぐ。リンカーン大統領の告別式典に際し，かつてないほど壮大な合唱団を結成するため，緊急に４月28日夜８時，新しいノースサイドのトゥルナーホール〔体育家協会の建物〕に参集されたい。」[7] この記事を出し，自ら同市内で活躍するドイツ系アメリカ人の合唱協会員から成る300名ほどの合唱団を臨時に組織したのが他ならぬオットー・ロープであった。また彼は「シカゴ・テレグラーフ紙 Chicago Telegraph」，「フライエ・プレッセ Freie Presse」，「イリノイ・シュターツ・ツァイトゥング紙 Illinois Staatszeitung」などのドイツ系アメリカ人の読者を対象としたドイツ語新聞紙上で，音楽批評家としても活躍したと伝えられている。ロープは1871年頃，「ゲルマニア男声合唱団 Germania Männerchor」，「コンコルディア合唱協会 Concordia Singing Society」，「オルフォイス合唱協会 Orpheus」，「スイス男声合唱団 Swiss Male Choire」，「アーベントリート合唱団 Abendlied Chor」，「エコー・カルテット Echo Quartet」といったシカゴのドイツ人合唱団の指揮者としてもその名が知られていたようである[8]。また1873年開催のウィーンでの「万国博覧会」には，イリノイ州政府の代表者として派遣されたと言われているが，これに関する公式文書は発見されてはいない。ロープのアメリカでの生活は，全てが順風満帆ではなかった。二度苦境に立たされている。1871年10月８日，演奏旅行で留守中に起きた「シカゴ大火 The Great Fire 1871」【完全に鎮火したのは10月10日の朝方，シカゴに壊滅的被害をもたらした】で，貴重な楽譜とピアノを住家もろとも失い，また1878年にも，取引先銀行の経営破綻で貯金の全てを失っている。だがこの1878年，ロープは新しく結成された「コンコルディア女性合唱団 Concordia Damenchor」（現在は存在しない）の指揮者の任を引き受け，この合唱団のために数多く作曲している。アメリカ連邦議会図書館には，「シカゴのコンコルディア女声合唱団に献呈　TO THE Concordia Damen-Chor of CHICAGO」あるいは「コンコルディア女声合唱団の御婦人方へ TO THE Ladies of the Concordia D.C.」と表紙に明記された楽譜【後出図版の8と９参照】が現存している。多くの曲を手がけた1879年は，ロープにとって最も充

た。因みに.イリノイ，オハイオ，ミズーリ，ウィスコンシンなどの州は現在でもドイツ系アメリカ人――つまり父方か母方の先祖がドイツ語を話す地区からアメリカへ移民しアメリカ市民となったその子孫，もしくは自ら移民してきた第一世代――が多く住む地区であり，この３州の，ミルウォーキー，シンシナティ，セントルイスを線で結んで出来上がった三角形を，「ジャーマン・トライアングル」と呼び，この領域に数多くのドイツ風の地名を見出すことが出来る。

[7] Ausschnitt aus dem Rheinisch Bergischen Kreisblatt. Westdeutscher Beobachter vom 1.Dez. 1933. ならびに Bergischer Kalender 1958. S.112　ここで「新しいノースサイドのトゥルナーホール〔体育家協会の建物〕」とあるのは，1880 年代にシカゴの労働運動の集会所としても重要な役割を果たした，運動練習場兼大ホールを持つ North Side Turner Hall のこと。

[8] Rudolf A Hofmeister : The Germans of Chicago. Stipes Publishing Co. 1976, p.222.

実した年であったに違いない。[9]

○　ハイデルベルク時代【1884年～1908年】

20年におよぶアメリカ生活に終止符をうち，1884年，ハイデルベルク市内の「ルッター通り52番地」に居を構えたオットー・ロープは50歳になっていた。何故に安定した合唱指揮者・作曲家の地位を捨ててロープが帰国したのかは謎である。1886年，学士会員の必需品である『一般ドイツ学生歌集 Allgemeines Deutsches Kommersbuch』[10]の出版を手がけるモーリッツ・シャウエンブルク社(Moritz Schauenburg Verlag)が，オットー・カンプ(Otto Kamp:1850－1922)の作詞した『ああ，至福に溢れる若き日々 O wonnevolle Jugentzeit』に対し曲を公募するキャンペーンを行った。この時、900曲の応募作品のなかからオットー・ロープの作品が選ばれたのであった[11]。これは彼にとって，この大学町での新たな出発を意味した。ロープが手がけた100曲以上にも及ぶ「学生歌」の中でも，前述のとおり『スミレが咲き誇る頃には学生だ』と『ハイデルベルク，汝若き泉よ』は現在も学士会会員がよく唱和する歌としてその不動の地位を占めている。1908年２月14日に心臓発作を起こし、近郊ネッカーゲミュンデの治療院に搬送され，同年９月11日，ロープは74歳の波乱に満ちた生涯を閉じ，ハイデルベルク市営墓地に埋葬された。ハイデルベルク市当局は，記念碑を建立する計画を立てたらしいが，これは実現されることなく，またロープの墓は荒れ果てたため，墓石に代わる小さな記念碑が同墓地公園の管理事務所脇に建てられた。さらに1985年の春，オットー・ロープの生誕150周年を祝し故郷リンドラー市に記念碑が建立された。

---

[9] Chicago Illinois 1879, City Directory によると，ロープこの頃はウエスト・ジャクソン通り 370 番地(370 West Jackson）に住んでいたようである。

[10] 「ADK・アー・デー・カー」と略号で，あるいは出版社所在地の「ラーLahhr」に因み『Die Lahrer Bibel（ラーの聖書）』とも呼ばれるこの学生歌集が，モーリッツ・シャウエンブルク（Moritz Schauenburg :1827-1895）によって始めて出版されたのが 1858 年，以来今日まで 160 版を重ねている。

[11] Josef Kühlheim: Otto Lob. Lindlars liederfroher großer Sohn. Gedenkblatt zur 50. Wiederkehr seines Todestages. In: Josef Gronewald: Gebäuder und Straße in Lindlar. Lindlar: Druckerei Braun. 1996. S.194.

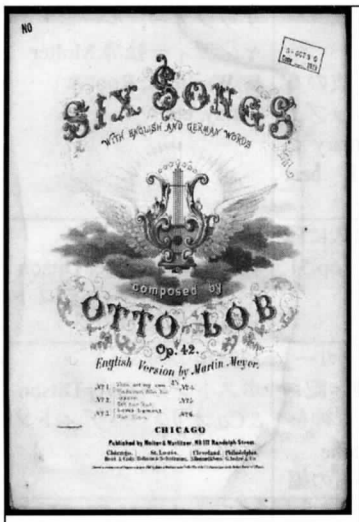
1985年5月25日，故郷リンドラー市に作られたオットー・ロープの記念碑（論者撮影）

ハイデルベルク市内墓地公園管理事務所横に1967年に墓石の代わりに設置された記念碑（論者撮影）

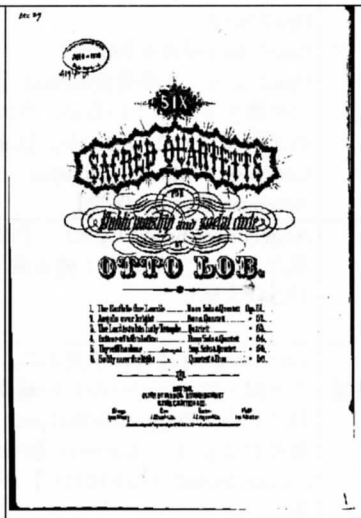
● アメリカ連邦議会図書館【Music for a nation: American sheet music, 1870-1885 : Library of Congress, Music Division 】に所蔵【ただし番号１と４は別】されているオットー・ロープの作品。

番号	楽譜名	収録曲と作品番号，他	出版年と出版社名
1	His Six songs with English and German words. Op.42 English Version by Martin Meyer 『彼の６つの歌・英語とドイツ語の歌詞つき。作品42・英語版：マーティン・メイヤー』	Thou art my own (Die du mien Alles bist) Op42.No.1:Repose (Geh' zur Ruh). Op42.No.2 Love's lament (Für Einen) Op42.No.3：楽譜集表紙名は『彼の６つの歌』となっているが，ウエッブ上の公開は Op42.No.2のみ。【Library of Congress. Music Division I hear American Singing 保管】	1868年 シカゴ：モルター・ヴルリッツアー，ルート・キャンディー社等 Molter & Wurlitzer, Root & Candy, etc.
2	Six Sacred Quartetts 『６つの宗教４重唱』	Angels ever bright Op.52 『永久に陽気な天使たち』備考：他５曲（op.51, 53,54,55,56）	1870年 ボストン：Oliver Ditson & Co. オリバー・ディトソン社
3	Otto Lob' Sacred Trios 『オットー・ロープの宗教３重唱』	Lord thy glory『神に栄光あれ』：カール・M・ウエーバーからの編曲と記されている。Praise thou the Lord 『神を賛美せよ』：E・ミュール【Etienne Nicolas Méhul (1763-1817) 】からの編曲。	1875年 ボストン：Oliver Ditson &Co.オリバー・ディトソン社
4	Israelitische Tempel-Gesänge. Hymnen für Sabath-und Festtage mit deutschem und englischem Text.『イスラエル寺院の歌』	この楽譜はピッツバーグの「カーネギー図書館 Carnegie Library of Pittsburgh」所蔵のもの。	1876年 シカゴ：ルボヴィツ社 E.Rubovits ただし印刷は「イリノイ・シュターツ・ツァイトゥング」社

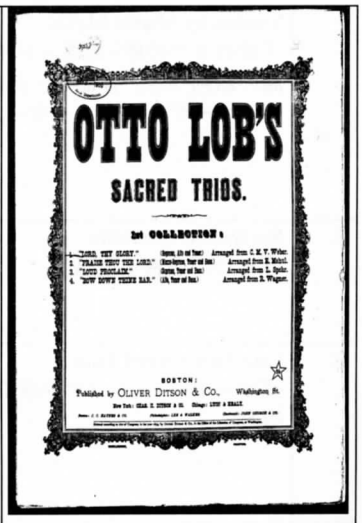
5	He has come to his own again! Popular Song and Chorus 『神は再来された』	He has come to his own again! 作品番号なし：ピアノ伴奏，声域指定なし。	1879年 シカゴ：ブライナーズ・サンズ社 S.Brainard's Sons
6	Ladis' Choirs. QUARTETES FOR FEMALE VOICES 『女性４重唱』	Stay with me (Bleib bei mir)Op.72.No.1：『私のそばにいて』：Longing (In die Ferne)『かなたへ』Op.72.No.2『春の歌』：Spring song (Frühlingslied)　Op.72.No.3：女性4部合唱無伴奏：第一・第二ソプラノ・第一・第二アルト Op.72.No.4の Good Night（Gut' Nacht）『おやすみ』	1879年 シカゴ：ブライナーズ・サンズ社 S.Brainard's Sons
7	Quartetts for Femeile Vocies, with German and English Words 『ドイツ語と英語歌詞付の女性４重唱』	Thou lovery star (Du lichter Stern) Op.73，No.1	1879年 シカゴ：シカゴ・ミュージック社 The Chicago Music Co.
8	Sweet Memory (Erinnerung) Op.73，No.1 『甘き思い出・作品73の１』	収録曲と作品番号：表題と同名 第一・第二・ソプラノ，アルト，ピアノ伴奏付き。「コンコルディア女性合唱団 Concordia Damen-Chor に献呈」と明示されている。	1879年 シカゴ：ブライナーズ・サンズ社 S.Brainard's Sons
9	SPRING AND LOVE （Frühling und Liebe） 『春と愛』	収録曲と作品番号：表題と同名：ピアノ伴奏つき女性３部合唱曲：「コンコルディア女性合唱団 Concordia Damen-Chor に献呈」と明示。：Op.80	1879年出版 シカゴ：ブライナーズ・サンズ社 S.Brainard's Sons



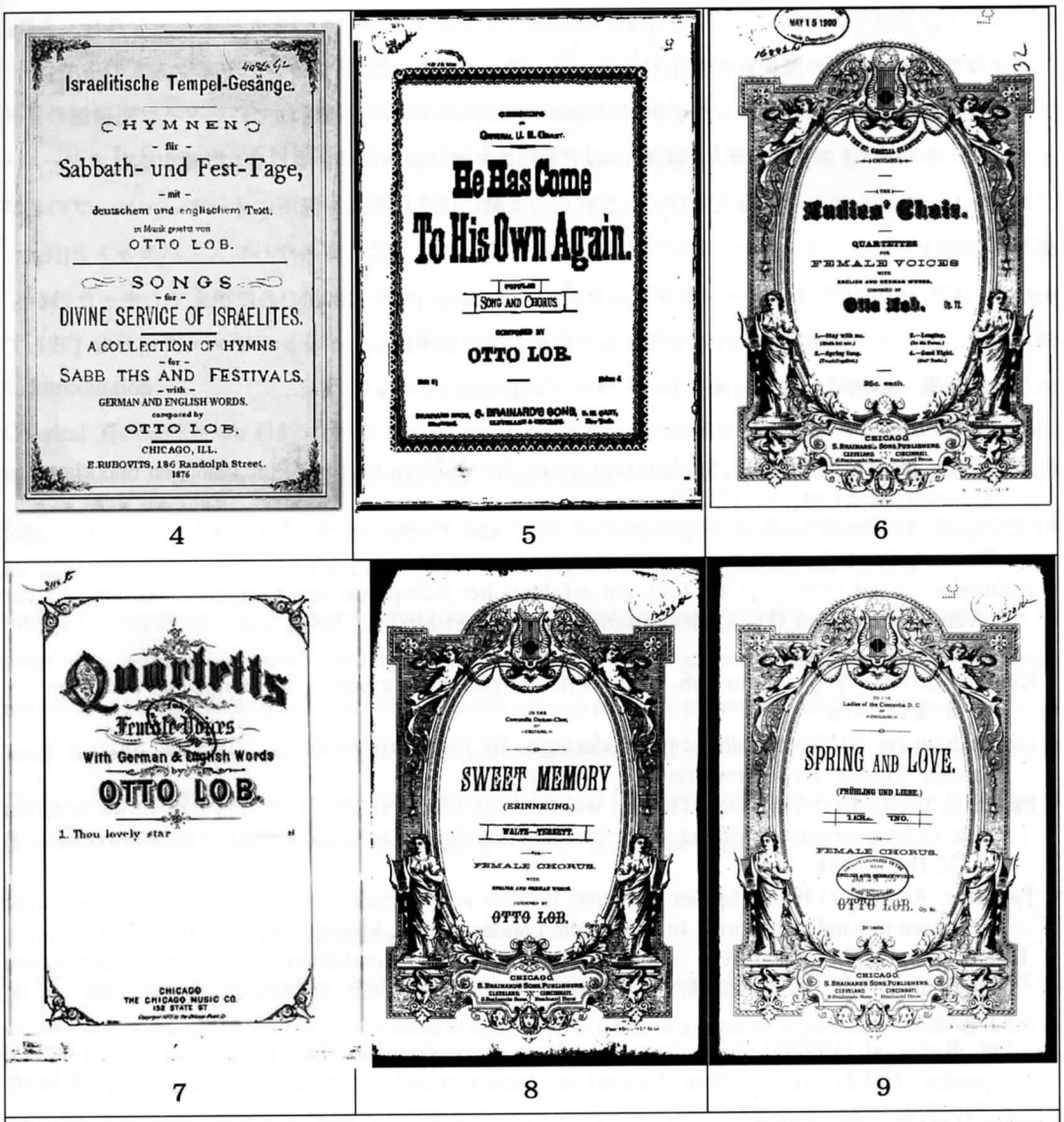
1



2



3



現在，アメリカ連邦議会図書館に保存されているオットー・ロープの楽譜資料は，この９つの楽譜集である。1868年に出版された楽譜の作品番号(Opus)が42の１で，最後の1879年の楽譜には作品番号(Op.80)とある。1879年に一挙に５冊もの楽譜集が出版されていることから，この頃のオットー・ロープの作曲家としての地位はゆるぎないものであったことが伺える。1876年に作曲した『イスラエル寺院の歌』と題するユダヤ教徒に捧げた宗教曲は1887年に第2版が出されている。

○ オットー・ロープに関する研究と文献

オートー・ロープに関する包括的な調査はドイツ側では，リンドラーの郷土史家ヨーゼフ・キュールハイム(Josef Külheim: ?－1961)と，「オットー・ロープ記念碑」建立に尽力した元リンドラー市長のリ

ヒャルト・ファブリチウス，ドイツ学生歌の研究家ライムント・ラングの３人によってなされてきた。アメリカでは，シカゴの歴史研究家ルドルフ・ホッフマイスターが，『シカゴのドイツ人』の中でロープについて言及している他，シンシナティで1860年代から10年近く出版されていたドイツ語雑誌の『ドイチェ・ピオニーア』と，テキサス州におけるドイツ系アメリカ人の「合唱協会」に関するセオドール・アルプレヒトの1975年の学位論文だけで，これらの文献にはそれぞれ１箇所にオットー・ロープの名が見られるだけである。オットー・ロープの名はおそらく，あまりにも有名なハンス・バラットカ(Hans Balatka: 1827－1899)[12]やオットー・ドゥレッセル(Otto Dressel: 1826－1890)の名に消えてしまったのかも知れない。アメリカ合衆国におけるクラッシク音楽の歴史を網羅したジョン・T・ハワードの『我らアメリカの音楽・300年』[13]にすらオットー・ロープの名は出ていない。

- Buchhorn, Josef (1928/29.): „Student sein, wenn die Veilchen blühen." In: Velhagen und klassings Monatshefte XLIII, , S.217-230.
- F.E.Coyne: In Reminiscence. Highlights of Men and Events in the Life of Chicago. Chicago: Privately Printed 1941.
- Kühlheim, Josef (1955) :„Otto Lob, ein erfolgreicher Komponist und Dirigent": Auszug aus der „Vereinsschrift des GV Männergesangvereins Engelskirchen. Nr.11 vom Okt. 1955 z.35. jähr. Bestehen"
- Kühlheim,Josef (1996): „Otto Lob. Lindlars liederfroher großer Sohn" In: Bergischer Kalender 1958.,S.111-116.
- Gedenkblatt zur 50. Wiederkehr seines Todestages. In: Josef Gronewald: Gebäude und Straßen in Lindlar. Lindlar: Druckerei Braun., S.189-196.
- Fablitius, Richard (1984a): Dem Gesang widmete der Lindlarer Otto Lob sein Leben. Im Amerika viele Gesangvereine gegründet – Vor 150 Jahren geboren. In: Kölner Stadt-Anzeiger Nr.303/OB 14. 31.Dez., 1984.
- Fablitius, Richard (1984b): Spätes Denkmal für den vergessenen Tondichter. Otto Lob wurde vor 150 Jahren in Lindlar geboren. In: Bergische Landeszeitung. Montag, 24. Dezember, 1984.
- Lang, Raimund (1985a): Ein seltenes Ereignis: Denkmalenthüllung für einen studentischen Komponisten. In: Acta Studentica. Österreichische Zeitschrift für Studentengeschichte. 16.Jg. Folge 59.
- Lang, Raimund (1990/91):Vergessen fast, doch nie verklungen. Der Komponist Otto Lob. In: Theodor Hölcke (Hg.): Vom Deutschen Studentenlied. (= Historia Academica) H.29/30. S.266-277.
- Hofmeister, Rudolf A. (1976): The Germans of Chicago. Stipes Publishing Co.

---

[12] 「ウィーン学生軍団」の一員として 1849 年の革命運動に参加後，同年秋アメリカに政治亡命した。音楽的才能と美声を買われ，ミルゥーキーの様々な音楽団体でボイストレーナの職を得，やがて指揮者として活動を始め，1851 年に「ドイツ音楽協会」を結成。1857 年にはシカゴ音楽祭での客演指揮で名を馳せ，1869 年には「シカゴ・フィルハーモニー協会」の指揮者として招聘され，後シカゴに居を構え音楽評論家・合唱指揮者・作曲家として活動した。男性合唱のための『歌の力 The Power of Song』(1856 年)，ソプラノとオーケストラのための 『フェスティヴァル・カンタータ Festival Cantata for soprano and orchester』(1869 年)その他 30 曲ほどの声楽曲を残している。

[13] John Tasker Howard:Our American Music. Three Hundred Years of It. New York: Thomas Y.Crowell Co.1951.